

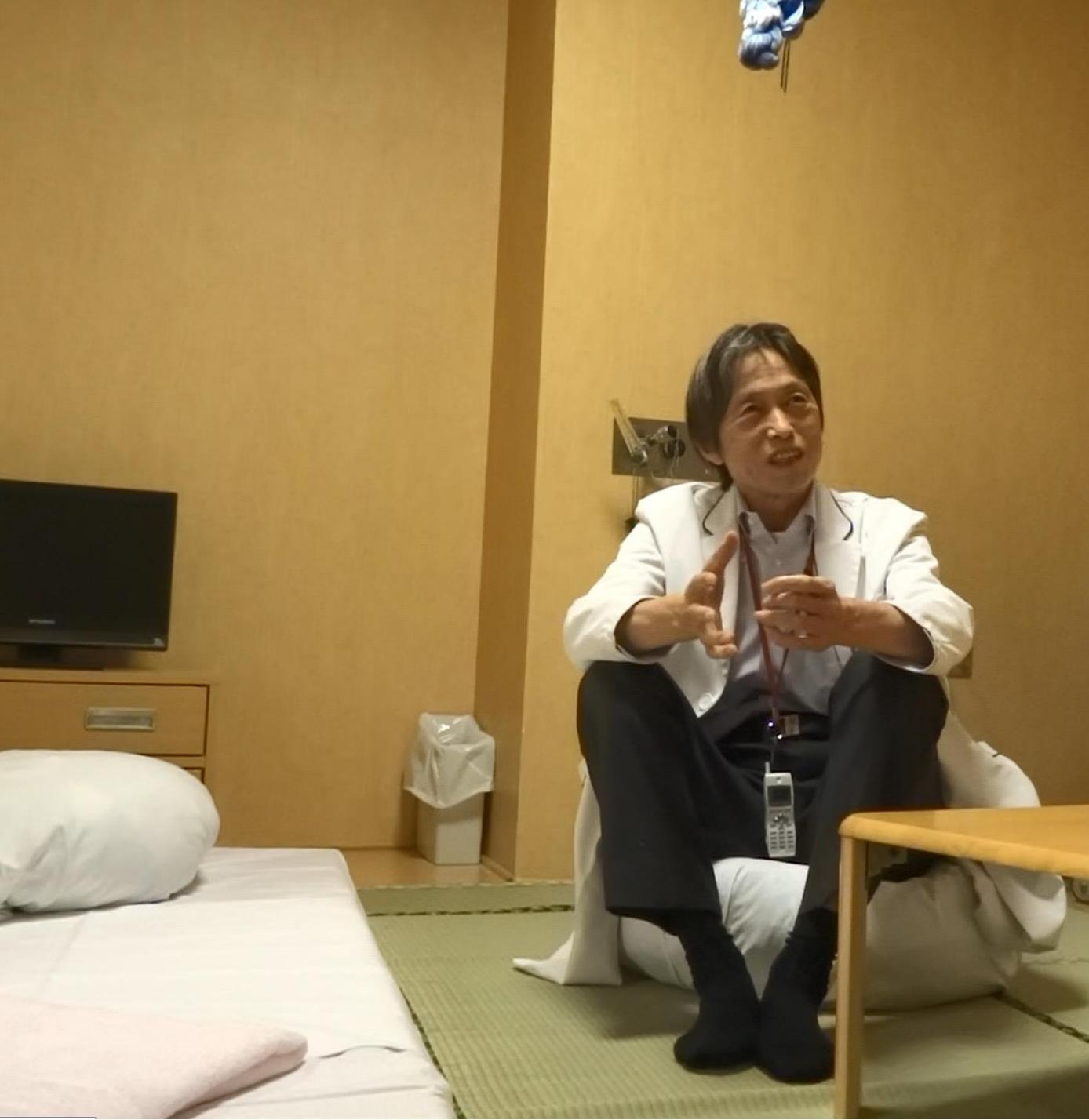


一 共感のひな型は母子関係にある

安全・安心のお産を提供することが現在のわが国の周産期の使命となっているが連日のように、乳幼児、児童虐待の報道がある現実を考えると、

フランス ドゥ ヴァール先生のいうように共感のひな型が母子関係にあるのだとすれば、私たちが、お産の際に提供すべきものは、安全・安心だけでは足りない私たちが提供したい温かいお産のために大切な、なにか…

私たちが忘れているなにかがあるのかもしれない



一社会性っていうけれども、
つまりそれは、フランス ドゥ ヴァール先生が
言っているような、人間が集団で生活して
生き残ったということは、社会で
絆をつくるのは、共感だったというのを考えると
社会性は共感とつながってくるよね

フランス ドゥ ヴァール先生の動画をみると

仲間のために憤れる…

「自分のために」ではなく、
家族のために、仲間のために
差別をされることに憤りを表現する動物たちが
いることを知る

私たちが、もともと持っている共感力が
ここにあるのではないかと感じる

妊娠中に、母の感情に胎動で応答する胎児が
いるように、私たちも生まれる前から、
一番身近な母に共感しているのかもしれない



一相手のことを思うことで オキシトシンが出るのかもしれないね

菊水先生は
生後すぐに親や兄弟と離された
仔犬は社会性が育ちにくいという

さらに、菊水先生の研究では、
犬の注視により、飼い主、犬ともに
オキシトシンの分泌量が増えることが
明らかになっている

相手の表情を見て、
お互いを見つめあい、共感しあうことが、
オキシトシンの分泌に関係しているのかもしれない

SNSで発信される「いいね」は
情報の共有であって、共感ではないのではないかと…

私たちが大切にしなければいけないのは
対面で感情を理解し、共有し共感すること



**一養老先生は、
自然とは人間が創ったものではない、
と言っている
自然、つまりお産は自然なものだから
予測もできないし、計算もできないものだよね**

人工環境の中にいると、
お産が予測も計算もできないものである
ということを忘れてしまう

はぐくまれるはずの
共感性が失われないように
医療者も母と子が見つめあい、
オキシトシンの恩恵にあずかれるような
環境を整えることを意識していきたい

予測できない、計算できないからこそ
「普通」の枠に収まらないお産があることを
大切にしなければならない

医療介入の有無に限らず
すべての母子、家族に
おなじように、大切な絆の礎(共感)がある